

研究結果報告書

満州・南洋文学における「民族協和」の比較研究

所属：東呉大学 外国語学部 日本語学科
役職：副教授
氏名：林 雪星

広島大学の図書館や大連の旧満鉄病院植民地資料展示場などで戦前資料を閲覧、蒐集し、成果の一部を東京、名古屋、台湾にて発表するなど、一年間の研究期間としては非常に充実したものであった。

本研究では、プロレタリア作家による満洲と南方における異民族像を通して、統治者・作家としてのスタンスを比較分析した。従来、プロレタリア作家の満洲・南方描写は戦争協力への転向という視点で論じられてきたが、異民族、被植民者への善意的な描写は作品の一題材であり、一括りにして五族協和の政策に迎合していると論断できないものがある。八木義徳が描いた労働者像、島木健作が移民政策の問題という現実的視点で描いた農業移民像、日向伸夫「第八号転轍機」の従業員像、牛島春子が描いた満洲民族の苦力像、これらは主従関係に位置しながらも、至近距離から満洲最下層の労働者を細かく観察したものであり、常に弱者に向けるまなざしが健在であることが判明した。

また、南方作品研究からは、仮面の自己と仮面の他者、すなわち米英に代わって登場した指導者としての日本人と友好的な被植民地者という主客体の対立構図は常に揺らいでいることが明らかになった。心細さ、劣等感、恐怖、負債感が行間に匂わせてある。林芙美子「原住民と融合ふ心」や里村欣三「ボルネオ物語」において繰り返し言及される異民族と日本人との同質性の確認作業は、民族共栄の隘路を切り開こうとする屈折の意志が逆照射されていると位置づけることが可能になった。同様に、『新生南方記』での里村の渾身の叫びは、プロレタリア作家としての意志の強さと真摯な態度に由来すると考えられる。

総じて、銃後の大衆が読者である作品には、同化も教化の意図も見当たらないものの、満洲作品では友好関係を描きつつも自民族との異質性を繰り返し確認され、南方作品では同質性を叫び続ける一方で異民族との距離が逆説されている。これらの成果をもとに、満映女優李香蘭の満洲と南方の問題も研究視野に入り、満洲への夏目漱石の視線も同時に伺うことができた。

研究成果の公表について

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

- 1 八木義徳文学における「民族協和」－「劉廣福」と「胡沙の花」をめぐって－・林雪星・植民地文化学会フォーラム・2015年7月12日・東京東大島文化センター
- 2 越境的李香蘭-從北到南(台灣篇)・林雪星／阮文雅・台湾流行歌謡-日本・中国との文化的交錯・シンポジウム・2015年7月18日・名古屋大学
- 3 八木義徳「女」－退化していく「男」・東呉大学教師成長社群日本語文学系文学読書会・阮文雅・2015年11月25日・台湾台北・東呉大学
- 4 夏目漱石と「満州」－「満韓ところどころ」から見る・林雪星・2016年5月2日・漱石』没後百年記念国際シンポジウム・台湾台北・台湾大学

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

越境的李香蘭-從北到南(台灣篇)・林雪星／阮文雅・台湾流行歌謡-日本・中国との文化的交錯シンポジウム論文集・2015年7月18日

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）

外地の北と南－李香蘭・八木義徳・里村欣三の軌跡をめぐって・林雪星・阮文雅合著・日月文化出版社・2017年12月出版